

研究タイトル:

物語メディアとしての画中詞の構造と表現



氏名:	江口 啓子 / EGUCHI Keiko	E-mail:	eguch@toyota-ct.ac.jp
職名:	准教授	学位:	博士(文学)
所属学会・協会:	中世文学会、説話文学会、名古屋大学国語国文学会		
キーワード:	画中詞、絵巻、奈良絵本、お伽草子、中世文学		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> ・古典籍の書誌調査と目録作成 ・古典籍の展覧における資料の展示、キャプション・図録解説の作成 ・中世文学や変体仮名(くずし字)に関する出前授業や講演 		

研究内容: 絵巻・絵本における画中詞の表現機能と構造に関する研究

物語は古くから絵と共に享受されてきた。そして、詞(ことば)と絵が交互に展開して一つの物語を表現する絵巻というメディアが生まれた。本来、絵巻は、文字テキストである「詞」と絵画テキストである「絵」の二つの領域に明確に分かれており、その二つは互いに領域を侵すことなく存在していた。ところが、中世のある時期に発明された画中詞は、明確であったはずのテキストと絵画の境界を越境し、より複雑な物語表現を可能にした。本研究はこの画中詞を詞・絵に並ぶ第三の物語メディアとして捉え、その構造と表現機能について考察し、新たな物語表現の地平を拓くことを目的としている。

(1) 画中詞とは何か

画中詞は、一三世紀に成立した説話・宗教絵巻において初めて見られる表現手法である。画中詞とは絵巻、絵本などにおいて、その絵の中に書き込まれたテキストを指す。画中詞として絵に書き込まれるのは主に、「～のところ」といった場面説明、人物名、そして登場人物の台詞である。中でも台詞として書き込まれた画中詞は詞と同様に「物語る」媒体となりうる。物語は、詞と画中詞という位相の異なる二つの文字テキストによって展開する。主に詞が物語の本筋を語り、画中詞は詞によって表出された物語世界を補ったり、時に離反したりすることで、豊かな物語世界を築いていく。

画中詞の書き込まれた絵は一見すると現在のマンガに通じるメディアのように思われるが、大きく異なるのは物語の本筋を語るのはあくまで詞であるという点である。例えるなら、挿絵入りの小説の、挿絵の部分がマンガになっているようなものであり、全体として一つの物語を構築しているのである。そういう意味では現代には存在しない表現手法であり、画中詞の分析は、現代における新しい物語表現手法を生み出す可能性を秘めている。

(2) <公/私>、<詞/画中詞>、<男/女>という構造

画中詞は一五、六世紀を中心に流行した物語表現であるが、すべてのジャンルの物語作品に取り入れられたわけではない。主に恋愛物語や異類物(動物や植物などが擬人化され、人間のように言葉を操り、物語の主人公となっているもの)に多く見られる。つまり、絵の中で「おしゃべり」しているのは、多くは女性や動物たちである。特に、中世において公的な記録からはその活躍を見いだしがたい女性たちが、絵の中では実に生き活きと声を発している。絵巻・絵本において、詞はあくまで物語の本筋を語る<公>の部分を担うのだとすれば、画中詞は<私>の部分にあたる。そういう意味では、画中詞は<公>的な記録からは拾い出すことが困難な女性たちの生き様の「記憶」であるとも言える。

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)	